

ヤンゴン素描 51

龍王ブーリダッタ本生 (その 1)

山形洋一

第一場、地上、カーシー国の王都ヴァーラーナシー：皇太子追放

カーシーの国王ブラフマダッタには皇太子がいましたが、この王子、出来が良すぎて王様に疎まれ、自分が王位にある間はどこぞに潜んでおれ、と命令されました。

第二場、地上、ヤムナー河畔：王子と龍女の愛の生活

国を追われた王子は、聖なる川ヤムナーのほとりに廬を編み、一人で質素に暮らしておりました。食料である木の根や野生の果物を探しに森に行っている間、夫を亡くしたばかりの若い龍女が水底から上がってきました。未亡人になったばかりの彼女は、他の龍女が夫とイチャイチャしているのを見ると、もう妬けて妬けて気が狂いそうになるので、地上の空気を吸いにきたのです。

砂浜に王子の足跡を見つけて、考えました。

——この足跡の主はどんなお人やろ？ 本気で出家したはるんやったら、わたの出る幕やない。けどもし、事情があつての出家やったら、ひょっとしてひょっとするかも。

龍女は龍宮に戻ると、天上界と見紛うような花と香を持ち出して、王子のベッドを豪華に飾ります。つまり一種の試験です。もし廬の主が心からの世捨て人なら、

「なんじゃ、このケバケバしいものは。ええい、汚らわしい」

と捨てるでしょう。だがもしこの世に執着があれば、花の褥（しとね）は魅力がある。

食料集めから戻ってきた王子は、美しく飾られたベッドに大喜び。楽しい夢を見て、翌日も晴れ晴れした気持ちで食べ物探しに出かけます。帰ってくると、ベッドがまた綺麗に整えられている。王子も流石に気になり、翌日は出かけたふりをして隠れて見ていると、龍女が花を持って廬に入っていきます。追いかけて、

「あんた、いったい誰や。えらい別嬪さんやけど」

「水の底の龍宮に住む、龍女でおます」

「ほう、さよか。ほんで、もう結婚はしたはるん？」

「してましたんやけど、先ほど旦那を亡くしたばかりで」

「ほうかあ、それは気の毒な。よかったら一緒に住もか」

「よろしゅうお頼み申します」

とまあ、関西弁だと色事はスムーズに運ぶようです。

龍女はその神通力で立派な宮殿を建て、美味しいご馳走も食卓に並ぶ。二人は誰にも邪魔されず、何不自由ない生活を送りました。やがて子供も二人生まれました。

男の子の名はサーガラ（海彦）。女の子の名はサムッダジャー（わたつみ姫）。

第三場、ヤムナー河畔：龍女の子別れ

やがてヴァーラーナシーの王様が亡くなったとの知らせを持って、大臣たちがヤムナー河畔に王子を迎えにきました。王子は妻子を連れて帰国したいのですが、奥さんは絶対に行かない、と言いはります。

「旦那はん、いや、王様、あなたは龍女のおぞましさをご存知あらしまへんよって、申し上げますけど、わてらが怒ったらもう、口から毒気を吐いて、人も牛もバタバタ死にます。中でも怖いのが女の嫉妬。今までは水入らずで幸せでおましたけど、もし都に行けばお妃五百人。私一人だけがいつもお側にと言う訳には行きまへん。それを思うただけでも、胸が焼けて、焼けて、オエッ」

「おいおい頼むで、こんなとこで毒なんぞ吐かんといてや」

「子たちと別れるのは辛うおますけど、二人の将来のためにお任せいたします。二人は体が乾くと弱りますよって、都までは水を張った丸木舟で運んどくはなれ。都では蓮池を掘ってそこで遊ばせとくはなれ。よろしゅうお頼み申します」と言って、泣く泣く別れました。

これが現代の王様だと、「お前一人が俺の妻、他に妃など置くものか」となるのですが、時は古代。王様としての体面があり、純愛路線は取れませんでした。人間、何が幸せかわかりませんね。

第四場、地上、都ヴァーラーナシー：カメの侵入

王様は即位して、代々の名跡（みょうせき）である「ブラフマダッタ」を継ぎ、王子と王女は庭の蓮池で日中を過ごしていました。

ある日のこと、新しく入れた水にカメが混じっていました。しばらくは池の底に沈んでいたカメが、息をするために浮き上がり、王子と王女に見つかってしまいます。

「キヤーア、気持ち悪う～」

「何じゃこいつは？夜叉か、それとも鬼か」

ヤムナー河畔で育った王子と王女がカメを見たことないとは、いささか奇妙な話ですが、そんな揚げ足をとっていると、昔話は先へ進みません。

城の兵隊がやってきて、カメを捉えます。子供たちを脅したと言うので、王様も大怒り。

「こやつを最も酷い刑で殺してまえ」

そこで大臣らが相談します。

「石臼に入れて石の杵で叩き潰したらよろし」

「いやいや、じっくり裏表焼いて食うてしもたらよろし」

「いやいや、鍋でくつくつ煮て食うのがもっとも確実」

そこへ口を挟んだのが、水を怖がる金槌大臣。

「ヤムナー川のごっつい渦の巻いているところに沈めたらどうやろ」

「わあ、それだけは堪忍しとくなはれ。潰しても、煮ても焼いても、どうぞお好きなように。せやけど水に溺れさすやなんて、そんな殺生な」

大臣たちだけでなく王様も、カメの怖がりようを真に受けて、ヤムナー川の大渦に放り込みます。

これとよく似た話が、実はアフリカにもあったらしく、アメリカに渡った黒人の話す昔話『ウサギどん、キツネどん』（岩波少年少女文学全集）に収められています。

今回はここまでにしておきましょう。続きは次号。